



Title	英語受動構文
Author(s)	畑, 雅勝
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編, 33(1): 33-42
Issue Date	1982-09
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4125">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4125</a>
Rights	

# 英語受動構文

畑 雅 勝

## I. 緒言

Katz と Postal は An Integrated Theory of Linguistic Descriptions で、次のような仮説をたてた。それを要約したものが、(1)である。

- (1) Transformations are meaning-preserving, in the following sense if two surface structures derive from exactly the same underlying structures and if their derivations differ only in that an optional transformation has applied in one but not the other, then they must have the same meaning.<sup>(1)</sup>

この仮説の意味するところは、もし英語の受動文が、変形によって、能動文と同じ基底構造から派生したものとすれば、次の二つの文、(2)と(3)は、同じ意味を表わすことになる。

- (2) Columbus discovered America.  
(3) America was discovered by Columbus.

## II. 復元可能性

ここで命令文(4)を考えてみると、(4)は(5)の you will を削除したものと考えられる。

- (4) Wash your hands.  
(5) You will wash your hands !

このことから、(4)は、(5)の you will を削除した後でも、その意味を保持しているものと考えられる。このことは、非常に重要な概念である。命令変形では、要素が削除されても、その本来の意味を失わないことになる。この関係は(6)で示される。

- (6) Wash your hands. ⇔ You will wash your hands.

もしも、変形が、Katz-Postal の仮説の通り、意味を変えないものであるならば、全て、変形によっ

て削除された要素は、復元可能であることになる。

復元可能の条件として Chomsky は次のように述べている<sup>(2)</sup>。

- (7) Each major categories have associated with them a 'dummy' e. g., 'it' for abstract nouns, 'someone' ('thing' ) and...this representation of the category is what actually must appear in the underlying strings for those transformations where the transform carries no indication of the actual terminal representation of this category in the underlying string...A deleted element is, therefore, always recoverable.

### III. 短縮受動文

IIで述べたような現象は、英語の受動文にも生じる。

- (8) a John was fired yesterday.  
 b Bill was questioned.  
 c Mary was bitten.  
 (9) a John was fired by someone yesterday.  
 b Bill was questioned by someone.  
 c Alice was bitten by something.<sup>(3)</sup>

(8) a~c は、(9) a~c の〈by phrase〉を削除した結果派生したもので、(8) a~c を短縮受動文という。短縮受動文が単に、〈by phrase〉を(9) a~c のような受動文から削除することによって派生したものか、又は、Chomsky 及び Emonds<sup>(4)</sup> の主張するように、別の変形規則によって派生したものかは、議論の分かれるところである。Freidin は、(9) a~c より〈by someone〉や〈by something〉を削除しても、先に述べた、Chomsky の復元可能の規則に触れることはないと説明している<sup>(5)</sup>。その理由は、someone も something も共に、 $N \rightarrow [N, \pm \text{Human}]$  の典型的な〈Pronominal noun〉とみなされるからである。従って次の関係が成り立つ。

- (10) John was fired yesterday.  $\Leftrightarrow$  John was fired by someone yesterday.

しかし、Emonds が述べているように、次の(11)と(12)とではこの関係が成り立たない<sup>(6)</sup>。

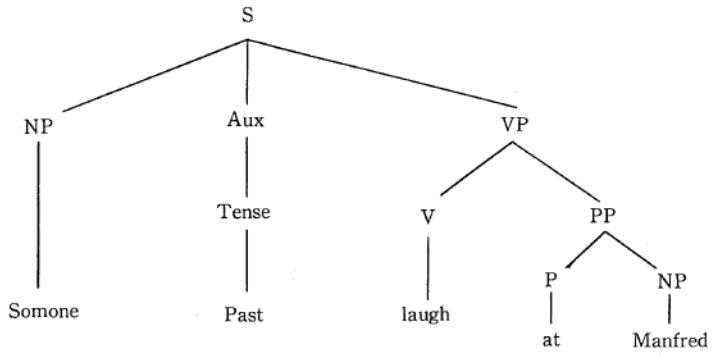
- (11) Germany was defeated.  
 (12) Germany was defeated by Russia.

この場合、(11)は(12)から派生されたと考えられないのは、by Russia が、削除に関する復元可能の規則に抵触しているからである。(11)は、必ずしも(12)から派生されたとは考えられず〈by phrase〉の生起に無限の可能性が含まれており(13)の a~c から派生されたとも考えられるからである。

- (13) a Germany was defeated by France.

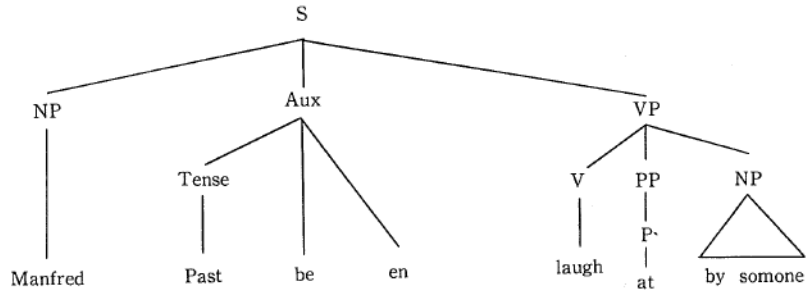


図 1



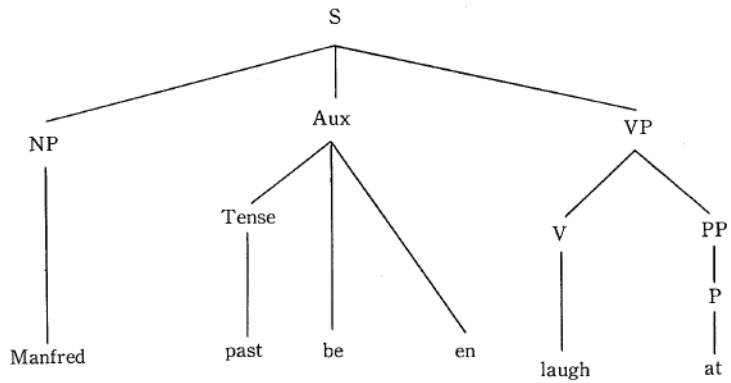
受動化規則

図 2



<Agent Deletion> 規則

図 3



最終的には、〈Affix Hopping〉の規則の適用を受けて、(25)の Manfred was laughed at を得ることになる。

最近の理論では、受動化に関する操作を二つの変形に分けていることは前に述べた。これら二つの変形は、それぞれ、〈Agent Postposing〉と〈NP Preposing〉である。

〈Agent Postposing〉は、主語を by によって導かれる代役記号〈dummy〉の占める位置へ義務的に移動し、主語の位置に代役名詞句を残す。尚、代役記号は△で表わす。

(28) 〈Agent Postposing〉 : X NP Y VP by △ Z

1 2 3 4 5 6 7 ⇨ 1 △ 3 4 5 2 7

〈NP Preposing〉は直接目的語を△の位置に移動し、同時に be+EN を V の前に挿入する。

(29) 〈NP Preposing〉 : X △ V NP Z

1 2 3 4 5 ⇨ 1 5 3 be+EN 4 φ 6

次に(30)Mary was seen by Bill を派生させる手順を以下の図で示すことにする。

図 4

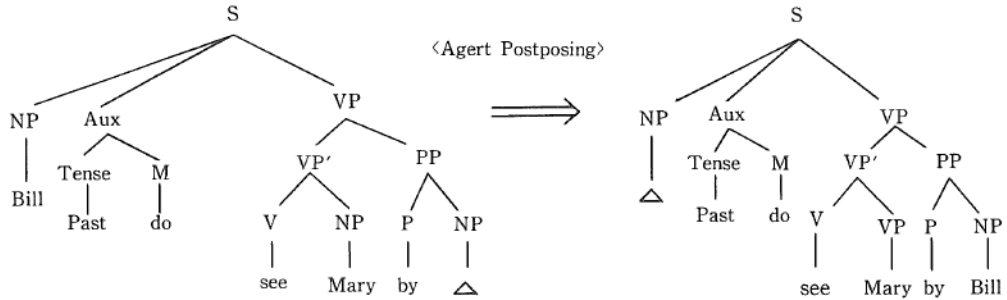
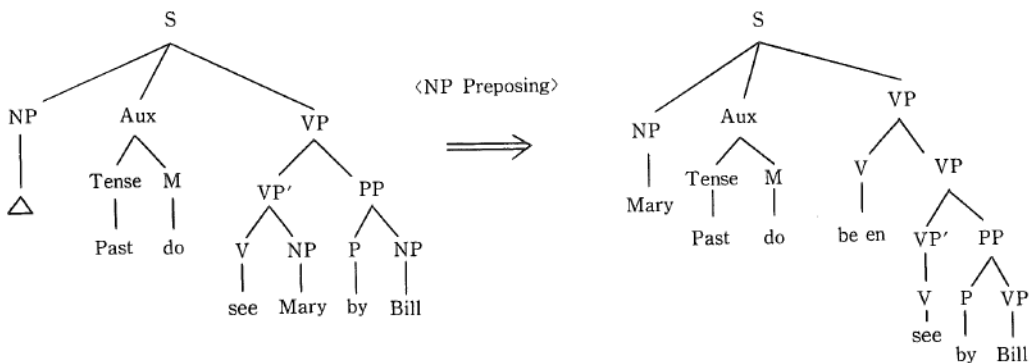


図 5



このようにして、最終的に、(30)Mary was seen by Billが派生される。

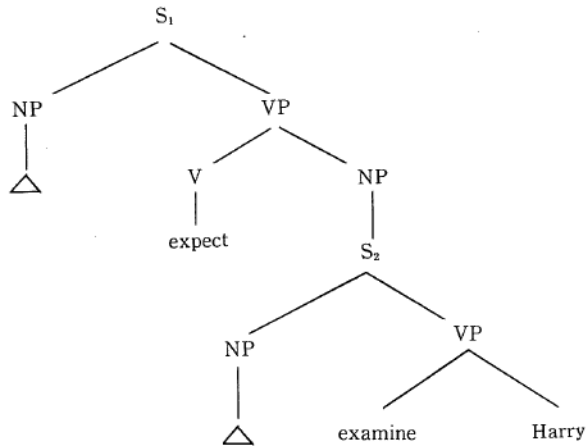
このような〈Agent Postposing〉と〈NP Preposing〉との二段階から成る操作の枠組の中で、〈短縮受動文〉の派生を説明することが出来る。今、Mary was arrested.を派生しようとするれば Culicover<sup>(8)</sup>の説明によると、

- (31) Input : NP[△] past do arrest Mary.
- 〈Agent P〉    〈適用しない〉
- 〈NP P〉    NP[Mary] past do be en arrest φ
- 〈Do replacement〉    Mary past be φ en arrest φ
- 〈Affix Hopping〉    Mary # be + Past # # arrest + en #.
- Mary was arrested.

しかしながら、この代役記号の理論は未だ首尾一貫したものは云えず理論修正が必要と思われる。例えば、Freidinの説明によると、次の文(32)と(33)を代役記号を使って派生しようとするれば、それらの基底構造は図6のようになる<sup>(9)</sup>。

- (32) Harry expects to be examined.
- (33) Harry is expected to be examined.

図 6



(33)は、HarryをS<sub>2</sub>の主語の位置で一度、更にS<sub>1</sub>の主語の位置で〈NP Preposing〉規則を適用することによって得られる。(32)は、S<sub>1</sub>を受動化する必要がないので、(33)の派生よりも問題があるように思われる。いずれにしても、(32)~(33)は、同義ではないのだから、同じ基底構造をもつ訳にはいかない。かくしてFreidinは次のように述べている。

- (34) In other words, the use of the empty node in the derivation of truncated passives is not motivated empirically but rather is a way of retaining a transformational analysis of passives.

事実、仮に〈代役記号〉を彼って短縮受動文の基底となる主語のないことを説明できるにしても、(32)~(33)の派生に於けるように、〈Complement Subject Deletion〉のような又別の変形の規則を使わなければならないのである。

#### V. 受動構文についての其他の問題

受動変形は、全ての他動詞に適用される訳ではなく、或種の動詞には適用されない場合がある。例えば、Chomsky も指摘しているように、様態の副詞類と自由に共起できないいくつかの動詞があって、これらは、受動変形を適用することができないとされる<sup>(11)</sup>。

- (35) a The book costs eight dollars.  
b \* Eight dollars are costed by the book.
- (36) a The basket weighs a ton.  
b \* A ton is weighed by that basket.
- (37) a John resembles his mother.  
b \* His mother is resembled by him.
- (38) a The dress fits Mary.  
b \* Mary is fitted by the dress.

しかし、これらの例は必ずしも、中間動詞に表われる特質とはいえない。例えば resemble は、或種の様態の副詞と共起することができる。

- (39) \* He has a good house completely.

とは言えないが、

- (40) He resembles his mother **completely**.

は、容認可能である。

又、次の例も興味深い。動詞 fit は、基底構造では、N [+Human] と共起する場合、受動変形を受ける<sup>(12)</sup>。

- (41) a John's new suit fits him.  
b \* John is fitted by his new suit.  
c The tailor fitted John (for his new suit).  
d John was fitted (for his new suit) by his tailor.

更に(41)dは短縮受動文としても認められる。

- (42) John was fitted (for his suit).



亦、動詞 want は受動変形で次のような制限を受ける<sup>(13)</sup>。

- (43) a The police wanted John.  
 b John was wanted by the police.  
 (44) a Mary wanted that cake.  
 b \* That cake was wanted by Mary.  
 (45) a John is wanted.  
 b \* That cake is wanted.

受動文と能動文の関係で、受動文は存在しても、それに対応する能動文のない例を Siegel は述べている<sup>(4)</sup>。

- (46) a Antarctica is uninhabited (by man).  
 b \* Man uninhabited Antarctica.  
 (47) a The garbage was uncollected.  
 b \* Someone uncollected the garbage.

もし、先に述べたように、受動文と能動文が同じ基底構造から派生するものとすれば、(46)a を得るには、

- (48) Man—uninhabited—Antarctica—by+△

という基底構造を考え、これに受動変形の規則を適用して(46)a を派生させようとするのは疑問が残るように思われる。それよりはむしろ

- (49) Man—inhabit—Antarctica—by+△

に受動変形規則を適用し、

- (50) Antarctica—is+inhabited—by+man.

を派生し、更に否定変形規則を適用する方が自然のように考えられる。しかし、この否定変形規則によって派生される(51)と(52)とは意味が全然異なるものと思われる。

- (51) Antarctica is not inhabited by man.  
 (52) Antarctica is uninhabited by man.

つまりこの違いは un と not との本質的な素性の違いによるものと考えられる。(52)を代役記号を使う変形操作で派生するよりは、un 自体がもつ素性から判断して、Siegel の主張するように uninhabited は [(un—[inhabit]<sub>v</sub>)<sub>v-ed</sub>]<sub>ADJ</sub> と分折される形容詞と考える方が妥当であると考えられるのである。

Siegel の説に関連して、受動構文と形容詞句とが類似しているということは明らかである。Wasow も述べているように、受動分詞が形容詞と同じ機能を示すのは、受動分詞が名詞句中に形容詞と同じ位置に表われるときである。

- (53) John is the most *respected* member of the club.  
 (54) Harry had the *painted* box in his house.

しかしながら、形容詞には適用するが受動分詞には適用しない変形が多数ある<sup>(16)</sup>。

- (55) a John considered Mary to be very intelligent.  
       b John considered Mary very intelligert.  
 (56) a John seems to be very happy.  
       b John seems very happy.  
 (57) a Mary finds John to be kind.  
       b Mary finds John kind.

上の例は、所謂〈To Be Deletion〉変形であって、形容詞句の直前でのみ適用するが、一般には、受動分詞の前では適用されないと考えられている。再び Culicover から例を上げると、

- (58) a John considered Mary to be offended by everything.  
       b \* John considered Mary *offended* by everything.  
 (59) a Mary doesn't seem to be attended by the press.  
       b \* Mary doesn't seem *attended* by the press.

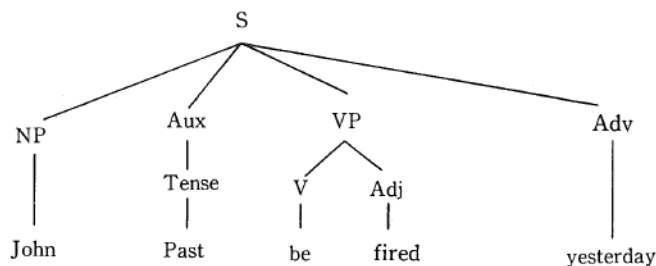
しかし Wasow はこの〈To Be Deletion〉の規則を否定し次のような例を示している<sup>(17)</sup>。

- (60) a John seemed annoyed at us.  
       b John looked convinced to run.

従って(53)と(54)と同じように、或種の受動分詞は形容詞的であると考えられる。この故に、(61)のような文が直接変形によらないで句構造の規則から派生されるという考えも成り立つのである。

- (61) John was fired yesterday.

図 7



## VI. 結 語

これまで生成文法の枠組の中で、英語の受動構文に付随する、いくつかの問題点を取り上げてみた。その結果、受動文を生成し且つ説明する完全な規則は、未だ完成していないように思われる。Grossも述べているように、受動変形の規則を設定するには、非常に多くの語い項目相互間についての検討が必要である。Grossの例を挙げると、動詞 *inhabit* は、受動文をもたないと言う<sup>(18)</sup>。

- (62) a Max inhabits Manhattan.  
b \* Manhattan is inhabited by Max.

しかし、この場合、主語に複数又は集合名詞が表われると受動文が可能になるという。

- (63) a Rich politicians inhabit Manhattan.  
b Manhattan is inhabited by rich politicians.

生成文法は未だこのような現象に対して確実な答を出していないように思われる。受動構文が果たして深層構造をもつのか、或いは単に表層構造しかもたないのか、其の他の問題にも一層考察を深めていく必要があろうと思考するものである。

## 註

- (1) Akmajian : An Introduction to the Principles of Transformational Syntax, p. 237. 1976.
- (2) Chomsky : Current Issues in Linguistic Theory, p. 71.
- (3) Culicover の Syntax より引用した。Culicover : Syntax, 1976.
- (4) Emonds. : A Transformational Approach to English Syntax.
- (5) Freidin : The Analysis of Passives, Lg, Vol. 51, 1976.
- (6) Emonds : *op. cit.*
- (7) これらの例文は Culicover Syntax より引用した。
- (8) Culicover : *op. cit.*
- (9) Freidin : *op. cit.*
- (10) Chomsky : Aspects of the Theory of Syntax, 1965.
- (11) これらの動詞を中間動詞ということがある。
- (12) Akmajian : *op. cit.*
- (13) Akmajian : *ibid.*
- (14) Siegel : Nonsources of Unpassive, in Syntax and Semantics, Vol. 2, pp. 301-317, 1973.
- (15) Wasow : Transformation and the Lexicon in Formal Syntax, pp. 327-360, 1977.
- (16) Culicover : *op. cit.*
- (17) Wasow : *op. cit.*
- (18) Gross, : On the failure of generative grammar. Lg, Vol. 55, 1979.

(本学助教授・札幌分校)